

○ 文元 ^{ふみもと} 基宝、川又俊介、森岡敦（NPO 法人関西ウェルビーイングクラブ）

【背景】1995年からの全国社会福祉協議会（以下社協）「ふれあい・いきいきサロン」活動（以下サロン活動）が実施されている。根底には地域社会の希薄化、少子高齢化などの社会的背景がある。筆者らの医院でも、2009年から地域共生の一助として哲学的カフェ（詳細は発表時）を実験的に実践している。

【目的】社協は、少子高齢化社会における地域政策、とくに高齢者におけるの自立支援を目的としたサロン活動に取り組んでおり、サロン数はH17年において約40000箇所と着実に増加していることから一定の評価がされている。しかし、各サロン運営者の世代交代、参加者の固定化（世代の偏り）、主体的参加者の拡大などの課題がある。

この課題を克服する方策として、さまざまな場でのサロンの取り組みと、各サロンが連携、協同し合うことが考えられる。

歯科医院は全国の地域で開業されており、幼児から高齢者まであらゆる世代の地域住民が通院している特徴がある。この特徴を生かして、歯科医院は住民間の積極的な出会いと交流の機会を設定しやすい。本発表では、歯科医院が地域住民のコミュニケーション機会を創造できるかについての可能性を検討してみる。

【方法】文元歯科医院で実施している哲学的カフェ（コンビカフェ）の参加者の属性（年代、性別）、参加数、参加世代傾向を参加記録表より調査する。

【結果及び考察】2009年3月から2011年3月までのカフェは61回開催された。参加延べ人数は166名。参加者数103人（男性34名、女性69名）で、各世代構成は、高齢者（65歳以上）が17名、成人（20～6

4歳）が40名、未成年（0歳～19歳）が46名であった。同一人物のカフェの参加回数は、1回89名、2回5名、3回1名、4回2名、5回以上が6名であった。5回以上の参加者の世代は、高齢者3名、成人3名であり男女比は1対1であった。2世代以上が参加したカフェは、約75%であった。

歯科医院でのカフェ開催において、一定数の参加者が認められた。特徴として各世代の参加が認められ、世代間の偏りは少なく、世代間のコミュニケーションの機会を構築できたといえる。しかし、他のサロンでもみられるように女性の参加者が多い。また1回限りの参加がほとんどであったので、継続したコミュニケーション機会を創造できたとは言えない。だが少数（6名）ながら継続した参加者、カフェ企画の関与、カフェを契機とした参加者同士の付き合いなどから歯科医院が地域住民のコミュニケーションの機会を創造する可能性を得た。今後参加者間の交流がどのように発展していくかを観察していく予定である。

【論点】高齢期においても健康で生きがい（well-being）をもって暮らしていける社会は、あらゆる世代に社会への安心感と信頼感をもたらすと思います。「地域社会の再構築においてどのようにデザインしていけば良いのか」について話し合いたいと思います。

地域保健、地域づくりに関心がある方の参加をお待ちしております。

（連絡先）文元基宝

NPO 法人関西ウェルビーイングクラブ

（事務局：文元歯科医院）

〒537-0023 大阪市東成区玉津3-8-6

mototaka@fumimotoshika.com